

平成28年度前期アクティブ・ラーニング取組状況(その他の取り組み)

・Q7、ノート提出 (1度のみ)、文字通りのプレゼンではないが、毎回の担当者にレポート (私が指導して直させたもの) を下にした発表をさせ、随時質問等をして答えさせている。ただし担当者だけに偏らないよう、全員に質問を向けて、毎回かならず全員が2, 3度は答えるよう工夫している。

Q9、付箋紙を渡して本の読み方を指導している。

Q14、毎回の授業の中身をふまえて3回に2度ほどだが、宿題を課して、次回までに事前に勉強しておくよう指示している。

(人文科学総合演習)

・講義終盤に課題を与え、Moodleを使用して回答を回収しています。次回の講義の冒頭で回答を紹介しています。

(家畜育種学)

・毎回出席の確認と、遅刻者には同級生から電話連絡させて、授業中に参加を促している。

(家畜学実習)

・テキストを貸与して、参考にするよう指示するとともに、講義中心の時間においては、ハンドアウトを配布している。

(牛削蹄実習)

・授業ではほぼ毎回マルチメディアを利用し、分かりやすい講義を目指しています。授業の最後には必ず小テストを行い、理解度の確認をしています。また、SFCにおいて、実際の施設や機械を見ながら実践的な講義を行っています。

(畜産機械・施設学)

・次回授業の資料を事前配布し、当日授業前に小テストを実施している。さらに、授業にはクリッカーを使用、入札実験などを行った。

(農業経済学)

・課題作業を通じて原理を理解させている。小テストを通じて重要事項の周知理解と理解度の確認を図っている。

コンピュータを使って学生個別に実際のデータを検索選択集計分析し企業・経営の評価をするとともに、学生たちが選択した経営間の比較を通じて経営の多様性とその成績・財務状態の多様性を理解させている。

(農業簿記論)

・別科の農場実習は1年と2年の2年間で一通りの内容を実施するため、ほとんどの授業内容を網羅できるが、まれに天候不順などの理由で予定の授業ができずに別な内容に変更する時もある。そのため、2年間の農場実習で学ぶべき内容を全て入れたテキストを一番初めの実習で配布し、実施はできなくても知識を得られるようにしている。

(農場実習)

・教員によるデモンストレーションと巡回して対話形式と実演による個別指導をしています。

(基礎学術ゼミナール)

・基本的に、各担当教員の調整役として対応しており、最初のオリエンテーション、最後のまとめと学生からの意見集約および

学外見学を担当している。ただし、学生から自分以外の担当教員の実習についての意見については、担当教員と打ち合わせし、できる限り次年度の授業で少しでも改善されるように努力している。

(基礎学術ゼミナール)

・授業中に話し合う課題について事前に知らせ個々の考えをまとめること、さらに授業時間内にグループディスカッションする時間を設け数人の話を聞き、最後に農家出身者と非農家出身者で各課題についての考えを述べ、教員もそれについてコメントするという流れで授業を行っています。話しきれない部分はレポートに記述してもらい、自分以外の考えを聞いて視野を広げること、その上で自分の考えを整理し、これからどう学んでいくのかを考える授業にしています。

(農畜産科学概論 I (畜産学))

・授業への理解の不十分な学生に補講を 3 回実施しました。

(数学概論)

・レポートの添削指導には多くの時間を要するが、全学的に取り組まれていない現状では今後も必要と考えている。

(生物学実験)

・Q7,数回の授業に1度小テストを行って、学生の理解度を確認している。小テストを通じて誤解や説明不足等があれば、次回にそれを補っている。小テストにあまり時間はかけられないため、行ったのは1/4ほど。

(社会思想)

・学生による発表の機会を設けています。また、毎回の講義内容に合わせた予習課題を与えるように努力しています。

(日本と世界の食文化)

・毎回、複数の人と会話をする時間、自主学习と質問の時間、文法の練習問題に取り組む時間という三本柱で主に授業を行っています。その他に3回から4回、ペア、シングル、グループでの発表を行っています。

(Basic English)

・授業中には多くの問題演習(英問英答など)をおこなっています。/ 学生を指名し、その発表(プレゼンテーション)内容について、全員の前で、英語によるフィードバックをおこなっています。/ 各レッスン終了ごとに、「ワークシート」の完成・提出を要求し、学生たちの内容理解の程度について確認しています。/ ムーダルを用いた自宅課題学習を必修とし、学生たちが日常的に英語学習を継続できる環境を整えています。

(English III (CALL))

・ Through various activities such as paired conversations, pair or group work for presentations, monitoring extensive reading program in Moodle, etc.

(English III (Current Topics))

・ Through various classroom and homework activities.

(English III (Current Topics))

・基本的にスペイン語 I とスペイン語 II で強化できなかった会話力を強化する予定である

(スペイン語 III)

・牛群管理に関わる現場の事例を演習課題として準備し、講義の後、グループで検討して、その結果を発表させる授業を実施しています。あわせて、しっかり復習できるように、毎回、授業内容に応じた分量(文字数)のレポートを提出してもらい、添削してお返ししています。

(生産獣医療学)

・座学授業ですが、グループディスカッションや発表の機会を設け、半演習のように実施していました。今回は人数が少なく、畜産の学生のみでしたので、将来畜産関連の企業に進むことを仮定したレポート課題を出すなど、聴講者により内容を一部変更して実施しました。

(生産獣医療学)

・実習に関して、作業自体は7～8名の班単位で作業をしてもらい、そのグループには少なくとも一人の教員か TA が指導するシステムをとっている。

(全学農畜産実習)

・全学農畜産実習の授業内容から、すべてが実習でありその範囲もかなり広いため、担当教員は専門外の指導も行うことになり、学生の学習意欲を高めるための取り組みに努力しているが、授業内容の性格から十分な対応が困難な側面があることを理解して

頂きたい。

(全学農畜産実習)

・本講義については、担当回が一回ということもあり、取り組める内容、項目にも限界があるが、食品に興味のある学生が多く受講していることから、今後も具体的な食品開発の例を示して、学生の興味を喚起し、学習意欲の向上に寄与したいと考えている。

(農畜産科学概論 II (食品科学))

・教員の HP や参考の HP 等を講義時間中に掲示し、ノートを取らせることで、情報源を認識させ、講義時間に教えきれない新しい情報の入手方法を伝えている。

(農畜産科学概論 IV (農業環境工学))

・授業終了時に小テストを実施して、授業内容の理解が深まるよう努めている。また、各畜種ごとに成績を評価することを実施し、3回の授業が1セットとなって理解できるような組み合わせとしている。

(家畜家禽論)

・担当授業の最後に、学生たちにレポート作成の課題を行っています。その内容は、授業内容の理解を確認し、総合的な考えをまとめ伝える能力のトレーニングを目的としています。

(家畜家禽論)

・大人数で、月曜日1講目ということもあり、毎年6月中寮祭が近づくと、学生の欠席率が上がったり、遅刻学生が増える。そのため、毎回小テストを実施するなど、授業に出席するようにさせたい。

(家畜家禽論)

・授業後の感想記入や小テストにてニーズの把握を行っている。

(農業と経済)

・事前にポータルサイトに授業資料を掲載し、授業開始時にプリントを配布している。

(農業と経済)

・講義時間が1コマと限られており、あまり深い話まで進めることはできないが、学生の興味や理解度を確認しながら分かりやすく解説したいと思います

(家畜生産と獣医学)

・毎回冒頭で小テストを実施しています。小テストのための復習が講義内容の理解につながっていると感じています。

(遺伝学)

・150名以上の講義科目であり、理論をベースにした科目であるため、学生の意見等について聞く要素は少ない。今後レポートを増やし、自習時間を増やす機会を強制的に増やすべきか検討中である。または中間テストの実施

(生物化学)

・授業の初めにルーブリックでの成績評価について説明し、毎回課題を出して小テストを行っている。また中間審査を行って、採点后コメントを付けて学生に返却している。

(食品栄養学)

・Moodleによる予習・復習およびそれに基づく小テストを実施した。また、グループワークの時間を作り、農業経済の時事問題について考察する記載を設けた。

(農業資源経済学)

・授業の前にポータルサイトに授業資料を掲載している。

(農業経営学)

・予習課題を提出されている。資料は毎回配布している。パワーポイントに書き込むことができる iPad を使用して学習効果を高めている。

(フードシステム学)

・参考の HP の表示や必要に応じて資料の配布を行い、講義で語れない部分の補足を行うとともに、興味を持つ学生に対しては、示した参考図書以外の専門書の貸し出しや外部の技術者への紹介等を行っている。また、専門分野の卒業生とのミーティングの場を時間外に作り、講義の示す社会での役割を直に伝達する機会を作っている。

(農地農村整備学)

・本実習では学生に自主的な圃場の管理を果しており、全体がアクティブラーニングの形式で成り立っている。

(環境保全型農畜産実習)

・授業では、実際の農畜産現場 (SFC) で堆肥等の作り方を実習したり、環境保全型農業について、実際の施設などを視察しながら説明しており、実践的かつ体験的な授業となるように心がけています。

(環境保全型農畜産実習)

・ 1) レクチャーカード
2) ある課題についてのグループワーク(3~4人で1グループを作りある課題について15分程度話し合ってもらい、最後に代表者が発表する)

3) 宿題についてじゃんけんを私と勝負して最後まで残った3~4人に発表してもらう。

(植物病理学)

・ ウィスコンシン大学マディソン校の Rakotondrafara 先生に特別講義を開いていただき、アメリカで実践されているアクティブラーニングに基づく講義を実施した。

(植物病理学)

・ 各回の小テストを行っている。また、自分担当回についての感想文をお願いしている。

(細菌学)

・ クリッカーの利用および小レポートを実施した。

(国際農業開発協力論)

・ 日本語でのしっかりとした知識の吸収と理解を促し、英語でもコミュニケーションが取れるように指導していきます。

(国際協力ディベート論)

・ 学生からの質問には各担当講師が直接回答し、興味のある学生は直接講師とコンタクトを取って講師の診療施設等で実習を行っている。対象学年が6年生であることか

ら学生もほぼ進路を決めており、伴侶動物臨床に興味のある学生と、そうでない学生とで授業への集中度が異なる。各講師にはできるだけ国家試験対応レベルの話から始めてもらうように調整している。

(総合臨床学Ⅲ)

・ 獣医学ユニットの多くの教員が参加し、協力しながら実施している。

(帯広基礎獣医学演習)

・ 実験を開始する前に関連する学術的背景の説明を行い、学生に質問をしている。実習の待ち時間には演習問題を課しグループ間の討論を促している。実習終了時に実験結果の報告と演習問題の解答を確認している。レポート作成では、実験結果から読み取れる考察に重点を置くように指導し、科学的な考察能力の育成を図っている。実験結果をプレゼンさせる実験結果報告会を設定しており、学生のプレゼン能力の向上を図っている(学生は意欲的に取り組んでいる)。

(生化学実習)

・ 質問等はメールやオフィスに来て頂くことで対応しています。

(機能制御薬理学)

・ 教員によるデモンストレーション、大学院生による実演(研究室に所属する大学院生がいる場合)、実験結果を発表させ対話形式(グループ内で討論させ代表者が意見をまとめる)で考察を行い結論へと導く、レポートを提出しコメントを行い返却すると共に評価を行う。

(薬理学実習)

・実習では実際に手を動かす実習作業のみならず、各回での実習内容・結果の記録をしてもらい、すべてを総合したレポートを課している。また、レポートに先立ち、実習内容を総合した結果を各班にプレゼンテーションしてもらっている。

(微生物学実習)

・実験の結果や実習で使用したスライド等の教材は、vetportalで学生に提供し、掲示した際はアナウンスを行い、自学自習において積極的に活用するように促した。

(微生物学実習)

・寄生虫や媒介昆虫の標本について、顕微鏡観察を行う。学生同士の議論、観察前の具体的な説明、授業前の予習課題、TAと教員による逐次質問を受付などを行っている。

(原虫病学・寄生虫病学実習)

・5-6年生の学生に実習を手伝ってもらっています。実習の質向上のためには、個別サポートが必要不可欠なので、正式なTAの措置が必要です。

(原虫病学・寄生虫病学実習)

・5年次までの講義や実習で取得した知識や技術を活用できるような実習内容に組んでみました。グループワークやプレゼンテーションは学習効果が高かったように思います。しかしながら、自分の担当分野では少し内容を詰め込みすぎた感もあり、今後は十分復習できる時間的余裕を与えてあげ

られるようにしたいと思います。

(食肉衛生学実習)

・毎回の授業内容に応じて、学生がまとめやすい文字数のレポートを課している。それを、金曜午後5時までに、メール添付で提出させ、週末に添削・評点して、翌週月曜までに返送している。

電子ファイルによるレポート提出は、提出期限、剽窃の有無などのチェックも容易で、また添削・返却に要する時間も短く、効率的である。

(生産獣医療学実習)

・多地点の授業なので、問いかけや小テストなど畜大の学生には容易にできるが、北大生には難しく、上記のような取組ができるように、私だけでなく獣医学の先生方にも協力してほしい。例えば北大生がクリッカーを使用できるか、または北大生は北大の授業で対応できるかなど。

(食品栄養学)

・この講義は履修人数が多く、かつテレビで北大へも授業を提供しているので、なかなか学生とのコミュニケーションを取りにくい。このような場合、どのような形でアクティブラーニングを取り入れたらいいのかを考えていきたい。

(草地飼料学)

・模擬医療面接により獣医療におけるコミュニケーションの重要性を理解を図っている。全ての学生が獣医師役、クライアント役、評価者役（服装、態度、バーバル&ノンバーバルコミュニケーション）を順番に

務め、様々な視点から医療面接におけるコミュニケーションを体感、客観視できるように工夫をしている。また学生にはクライアント役用の資料として病畜シナリオを作成させ、これにより自分のペットが病気になった場合のシミュレーションをし、より共感的なコミュニケーションができるよう意識させている。これまでの獣医学教育で初めて導入された科目であるため、学生や協力教員の意見を積極的に取り入れながら、より良い科目にしていきたい。

(コミュニケーション論演習)

・クリッカーの利用および小レポートを実施した。

(国際農業開発協力論)

・コンピュータソフトを用いて、個体群変動のシミュレーション分析の課題を毎回宿題として課し、生物種の保全や環境アセスメントで使われる手法を体験できるようにしている。

(畜産環境リスク管理学)

・宿題と自習課題を出しています。

(品質管理)

・大家畜(牛、馬)や中小家畜(羊、来年度から鶏も加える予定)の生体そのもの、エサ、飼育施設など関連することについて、感覚的に学び、後期からの座学でイメージしやすいように種を播くような位置づけで実施している実習です。また、将来の研究や就職の選択肢が広がるように十勝管内の畜産関連機関を見学し、専門を学ぶ前の学生でも理解できるように説明して頂き、畜

産業界の知見を広げられるように学生のコメントも聞きながら見学先を設定しています。

(家畜生産科学実習 I)

・実習ではあるが、Moodleを利用して、学生自らプリントアウトしてテキストの準備をするなど、実習に参加するようする予定です。また実習後は Moodle でレポート提出を受け付けるようにする予定です。

(家畜生産科学実習 I)

・受講生を半分に分け、各班 3 週連続で同じ牛に触れるようにしており、さらに各班を 4 グループに分け、実習を実施しています。1 回目は半分座学で生殖器の構造も含めた丁寧な説明を行い、まずは牛に慣れること、2 回目・3 回目は 1 回あたりの時間を短く、回数は多く触れるようにしながら、直腸検査ができるようにし、超音波画像診断装置により答え合わせもしています。また、実習中に発情行動が見られた牛を観察し、卵巣の状況などを説明しており、体感的に学習できるようにしています。

(家畜生産科学実習 II)

・1) 対象家畜を増やした

乳牛だけでなく、乗用馬も実習で取り扱い、同じ大動物の乳牛と比較して実習できるようにカリキュラムを設定した。
2) 人工授精師資格取得のために、実習内容を再構築し、担当教員を増加した。より実習内容を詳細にした。

(家畜生産科学実習 II)

・人数が多いので、2 班に対して 2 回づつ

同じ実習を行っている。

(家畜生産科学実習Ⅱ)

・ 毎回レポートを課し、添削して返却し、復習ができるようにしています。

実習は、原則、少人数グループでディスカッションしながら取り組むようになっています。

(家畜生産科学実習Ⅱ)

・ 獣医の学生と畜産の学生、帯広と札幌と履修する学生の条件がかなり異なるので、どのような形でアクティブラーニングを取り入れられるのかを考えていきたい(適当な例がありましたら紹介してほしい)。

(草地飼料学)

・ 1) 講演会参加

年によっては、乳房炎などの授業に関連する講演会へ授業振替で参加させて、レポートを課している。

2) 現場獣医師の授業

年により共済獣医師に乳房炎治療やその予防など、酪農家の現場での話を聞く機会を授業内に設けている。

(乳生産科学)

・ この実習の担当分は食品の栄養素の種類やカロリー計算を講義形式で行っているため、実験などは行っていない。しかし、課題を出してカロリーの原理やその計算を理解しているか小テストやレポートで判断している。

(食品科学基礎実習Ⅰ)

・ 学生が実習内容に興味を持てるよう継続的に実習内容を最新のものに改変し、講義方法を工夫するつもりである。

(食品科学基礎実習Ⅰ)

・ 今後も、学生が興味を持ち、学習意欲が向上する様講義内容、講義方法の改善に継続的に努力するつもりである。

(農産資源利用学)

・ 写真などを活用して、より分かり易くなるように努力しています。

(農産資源利用学)

・ 学外でのアンケート調査の実施、調査結果の取り纏めとプレゼンテーション、ポスター作り、取り纏めをオープンキャンパスで報告することなど、企画、調査、取り纏め、発表の全体を、学生主体ですすめている。

(農業経済学実習Ⅱ)

・ 実習なので、基本的にはフィールドと実験室で行っています。

農作物の保存に不可欠な乾燥工程の理論を実習によって体験的に理解する実習を行っています。

また、農業機械が耕起や踏圧などで携わる「土壌」の構造を土壌の硬度や三相構造など体験的実習により深く理解できる実習に取り組んでいます

(農業システム工学実習)